



スエズ運河のそばを歩く羊とヤギ。エジプトらしい風景だ



日本人技術者が、現地の人々に安全教育を繰り返して行った



船のかじの先端に取り付けられた直径約3メートルのカッターの交換作業。54本の刃先(カッターチップ)が、スエズ運河の可能性を切り開いていった

遠く先まで延びるスエズ運河。その存在感は絶大だ

「失敗したらゼロからスタートすればいい」

アフリカ大陸の入り口、エジプトの東側に位置するスエズ運河。地中海と紅海をつなぐ全長約195キロにも及ぶこの運河は、年間1万5000隻もの船が行き交い、世界の物流の要となっている。

スエズ運河が完成したのは今から140年以上前、1869年のこと。フランス人実業家フェルディナン・ド・レセップスのイニシアチブの下、炎天下の過酷な自然環境の中でエジプト人たちが汗を流し、10年かけて建設が進められた。当時「地球を小さくした」とも評されたように、新しい運河の誕生はヨーロッパとアジアの距離を大幅に短縮させたのだ。

しばらくはイギリスやフランスの利権争いが続いたが、1956年にはエジプト政府により国有化。しかしこの時、スエズ運河は大きな決断の局面に立たされた。

ていた。当時の水深は約10メートル。世界的な船舶の大型化に、対応できなくなっていたのだ。船が通れないのでは意味がない。そこで政府は国家の一大事業として「スエズ運河拡張プロジェクト」を立案。水深を15メートル近くにまで掘削し、最大級のタンカーも通れるように運河を拡張することにした。

この工事の国際入札は世界各国から注目を浴び、多くの名だたる建設会社の手を挙げた。日本からは五洋建設株式会社(旧水野組)が参加。このために、新しくポンプ浚渫船※1「スエズ」を発注するという力を入れようだった。「入札に失敗したら、またゼロからスタートすればいい」。水野哲太郎社長(当時)の大胆な決断が功を奏し、初めての海外進出にして、見事に一番札を勝ち取った。

しかし、最初は何もかもが一筋縄にはいかなかった。船舶が往來するたびに中断を余儀なくされる工事。さらに現場を苦しめ

世界に開け エジプトのスエズ運河

ヨーロッパとアジアをつなぐ、国際航路の要として知られるスエズ運河。今から半世紀前、世界的な船舶の大型化に対応すべく、20年にわたり日本の建設会社の技術者たちが奮闘した。

たのが「悪魔の岩盤」だった。コンクリートの5倍の固さともいわれる運河に潜む岩盤が、ポンプ浚渫船のカッターチップを砕いてしまった。このままでは工事が進まない。日本人の技術者たちは画用紙を切り折りし、「悪魔の岩盤」に太刀打ちできる刃の大きさ、角度を徹底的に分析。改良に改良を重ね、やつのこととで専用の「特殊カッターチップ」の完成にこぎつけた。何があっても屈しない日本人の精神力、妥協のない技術力の評判は、見る見るうちに世界中に広まっていった。

戦争による閉鎖から復活への道筋

しかし67年、第3次中東戦争の勃発によりプロジェクトは暗礁に乗り上げる。イスラエル軍の侵略を免れるため、エジプト政府は69年からスエズ運河を全面閉鎖。ヨーロッパとアジアをつなぐ航路は完全に寸断され、各国の船舶は、南アメリカ共和国のケープタウンを経由せざるを得なくなった。

戦争の終結を待ち、7年の月日を経て、スエズ運河は再びその門を開いた。中断されていた拡張工事も再開され、引き続き、

その大部分を五洋建設が担当することになった。情勢悪化により多くの会社が手を引いていく中で、水野社長は何度も現地に足を運び、工事の再開を見据えてエジプト側と会談を重ねていったのだ。時を同じくして、エジプト政府の要請を受けて、日本もスエズ運河拡張のための支援に乗り出した※2。その内容は総額610億円の円借款の供与。プロジェクト全体の支援額の2割に及ぶ額だった。さらにその後、新たな浚渫船の購入などを120億円の円借款で支援。JICAの資金援助と現地の人々と手を取り合い懸命に働く日本人技術者の功績とが相乗効果を生み出し、エジプトでの日本のプレゼンスは高まっていった。

そして80年2月、スエズ運河は新たに「巨大運河」として生まれ変わった。開通式では常にエジプトの人々に寄り添い続けた水野社長に、プロジェクト最大の功労者として勲章が授与された。スエズ運河の工事は、決して楽なものではなかった。しかしそれでも当時かわった五洋建設の社員らは皆、「長かったがそれだけ価値のある仕事だった」と口をそろえる。そしてJICAはその後も、待機泊地の拡張、運河の管理・経営能力の改善などの支援を継続。スエズ運河を見守り続けている。

今日も穏やかに、世界をつなぐ航路として活躍するスエズ運河。今年1月の政変後も、観光業が落ち込む中、貴重な外貨収入源としてエジプト経済に多大な貢献を果たす。スエズのために汗を流した技術者たちの魂は、ここに生き続けている。



船舶の往來が絶えない現在のスエズ運河。その中には日本の船舶の姿も見える。運河による収益はエジプトの国内総生産の約2%、経常収入の約8%を占めている



History

次世代への財産

資料提供：五洋建設株式会社

※1. 水底の土砂を掘り削る船。先端に取り付けられたカッターにより原地盤を掘削し、ポンプで吸い込み、パイプラインで土砂を搬送する。
※2. 当時は海外経済協力基金(OECF)が円借款を担当。1999年から国際協力銀行(JBIC)に業務を引き継ぎ、2008年10月のJICA-JBIC統合からJICAに移行。